

書評

大野博司 著

感染症入門レクチャーノート

済生会福岡総合病院・臨床教育部長

田 中 和 豊

現在、日本の医療界の「感染症ブーム」は、ばい菌の無法地帯とも言える日本で、病める人々をばい菌の魔の手から解放すべく立ち上がった正義感あふれる英雄たちによって作られた。そのきら星のごとく現れた英雄たちの一人が、今回『感染症入門レクチャーノート』を執筆された大野博司先生である。大野博司先生は、自主的に学生向けにセミナーを開催するなど精力的な活動をされることで有名な若手医師期待のホープである。彼の初の単独執筆となるこの本はまさに彼の努力の「結晶」である。

あまたある感染症関係の書籍の中で、本書の最大の特徴は、「微生物—抗菌薬・薬理学—臨床感染症」のトライアングルを意識しながら、それを視覚化したことである。著者考案の「微生物ガイド(臨床で重要な微生物を6つに分類したダイアグラム)」と「抗菌薬マップ(その6つの分類の、そ

れぞれどこにどういった抗菌薬が効くかを示した図)」は非常に有用である。「微生物ガイド」は例えてみれば敵の布陣である。また、「抗菌薬マップ」はわれわれの持っている個々の武器の特性を示している。このように敵の布陣と武器の特性を視覚化することによって、感染症との闘いをまるで将棋や囲碁のように理詰めで行うことが可能になる。まさに孫子と言ったように“敵を知り、己を知れば百戦危うからず”なのである。この視覚化以外に、ともすれば羅列に終わってしまう百科事典的な感染症の知識も簡潔にポイントをついてよくまとまっていて、見たい図表や調べたい知識がすぐ探せるのも本書の魅力である。

Chlamydia→*Chlamidophila*,
Pneumocystis carinii→*Pneumocystis jiroveci* など微生物の名称の変更などの最新の知識も網羅されている。このため、人をあざ笑うかのようにお笑い芸人並みにコ

ロコロと名称を変更する微生物にもついていける。また、本書では随所に column があり、そこには仕事や人生に対する筆者の真摯な態度が見受けられる。医療者はばい菌や傷病を退治することに専念する余りに、ともすると知らないうちに自分自身が病院・家庭や社会の「ばい菌」扱いされがちである。著者はこのような愚を犯してしまわないことを十分に心がけている「人間的な」医師なのである。

この本の出現で、いままでやりたい放題やってきたばい菌たちも、身の危険を感じ恐れおののいて悲鳴をあげている姿が目につく。ばい菌さん、ご愁傷さま。ただひとつ、この本は講義ノートであるので、何も知らない初学者が通読しても理解するのは難しいかもしれない。その意味で1冊目の本というよりは、ある程度勉強したものが知識を整理するのに用いる2冊目以降の本かもしれない。その欠点を補うにはやはり評判の高い著者自身の講義を聴くのがいいだろう。私もこの本を持って著者の講義を早く聴いてみたいと思っている。

〔A5変型 頁328 2006年
定価3,990円(本体3,800円+
税5%) 医学書院刊〕